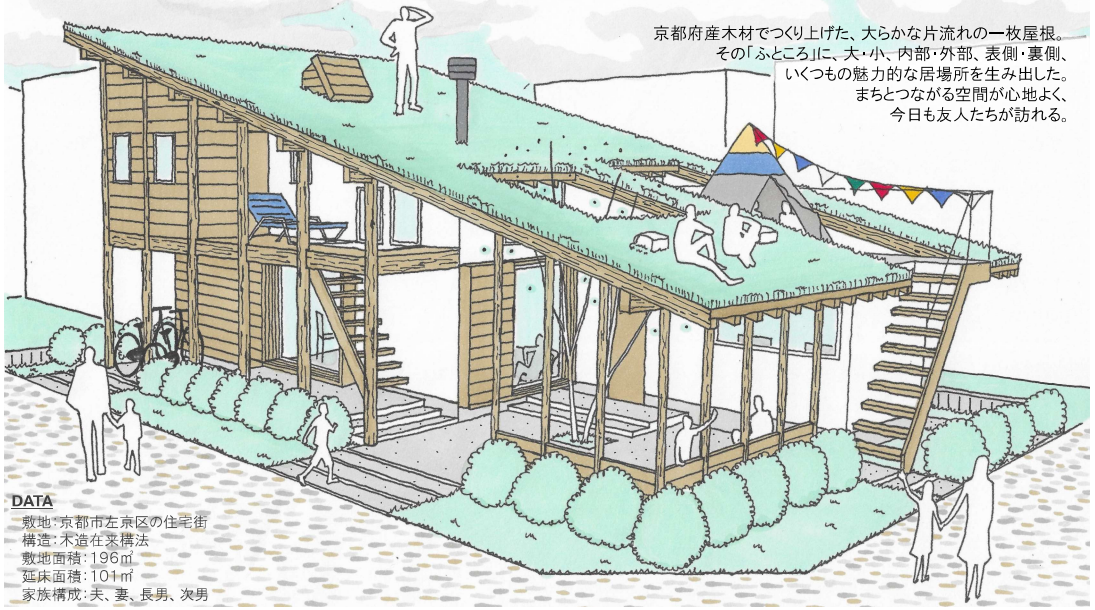
一枚屋根のふところに住まう

京都府産木材でつくり上げた、大らかな片流れの一枚屋根。
その「ふところ」に、大・小、内部・外部、表側・裏側、
いくつもの魅力的な居場所を生み出した。
まちとつながる空間が心地よく、
今日も友人たちが訪れる。

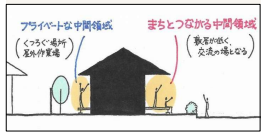


DATA
敷地:京都市左京区の住宅街
構造:木造在来構法
敷地面積:196㎡
延床面積:101㎡
家族構成:夫、妻、長男、次男

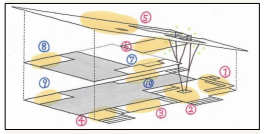
1 内部と外部の中間領域

■現代における中間領域の役割
中間領域とは、建物の内部と外部の間に置かれた空間を指す。例えば縁側や土間など、日本では古くから温熱的な緩衝帯の役割を担ってきた。
現代では、住宅の気密断熱性能が向上したため、環境装置としての中間領域は必須ではなくなり、空間の心地よさを生かした魅力的な居場所としての中間領域が求められる。

■2種類の中間領域
本作品では、建物の内部と外部の中間領域を、「まちとつながる中間領域」、「プライベートな中間領域」の2種類に分けて考える。



2 一枚屋根がもたらす中間領域



大きな一枚屋根に覆われた空間を壁・床で仕切ることにより、大小いくつもの魅力的な中間領域を構成した。

まちとつながる中間領域
①敷居の低いあずまやコーナー
②樹木のアプローチ
③ダイニングとつながるテラス
④雨に濡れない駐輪場
⑤周囲に緑を提供する芝屋根
⑥芝屋根とつながる屋上バルコニー

プライベートな中間領域
⑦寝室直結ベランダ
⑧子ども室直結ベランダ
⑨視線も雨も気にしない物干し場
⑩薪割ができる作業場

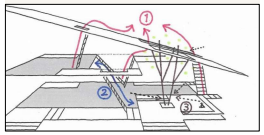
3 自由な動線、空間のつながり

壁・床で仕切られた空間を、行き来が自由な動線や開口でつなぐことで、それぞれの空間の魅力や使いやすさは倍増する。以下は一部の例である。

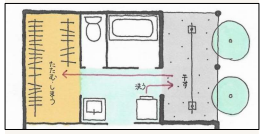
■芝屋根へのアクセスは3通り…①
屋内の1階・2階、屋外から行き来できる芝屋根は、住人が身近に感じることができ、とても使いやすい。

■2種類の中間領域をつなぐ…②
「まちとつながる中間領域」と「プライベートな中間領域」を行き来できる。

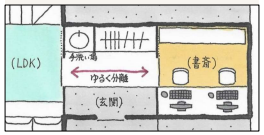
■樹木でつながる空間…③
樹木は、あずまやコーナー・書斎・リビング・屋上の空間を視界的につなぐ。



4 子育てライフを楽しむ機能性



魅力的な空間構成とともに、住宅としての現実的な生活機能も欠かせない。
スマートな洗濯動線により、限られた時間の中で家事を手早く終わらせ、子どもとの時間を確保できる。
また、アフターコロナの必須機能として、玄関すぐの手洗い場と、子どもがいてもリモートワークのしやすい「離れ」感覚の快適な書斎を設けた。

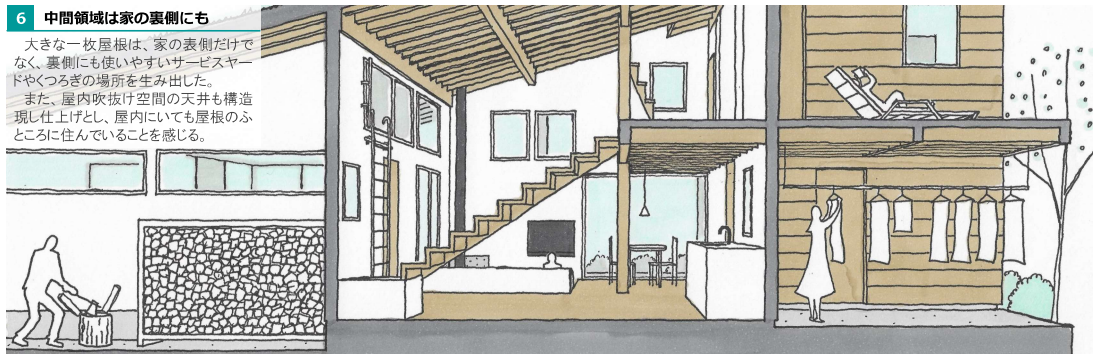


5 京都産木材を味わう構造現し

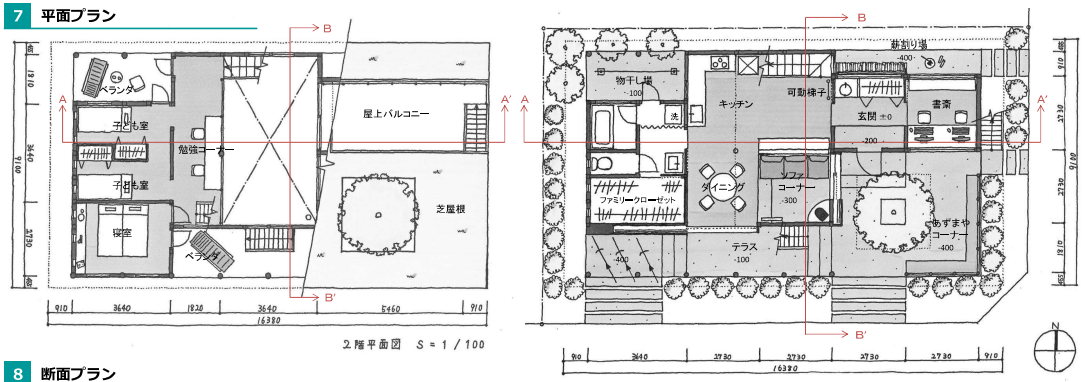
■あずまやコーナー
垂木構造現し仕上の屋根、それを力強く支える丸太柱・母屋の内側の空間。
建物外壁の開口により屋内(リビング・書斎)とつながりながら、まちとつながり、樹木を介して空ともつながる外部空間でもある。
放課後、子どもたちはここに友だちをよび、父や母が仕事から帰るまでの時間を、楽しく安心して過ごす。

6 中間領域は家の裏側にも

大きな一枚屋根は、家の表側だけでなく、裏側にも使いやすいサービスヤードやくつろぎの場所を生み出した。
また、屋内吹抜け空間の天井も構造現し仕上げとし、屋内にいても屋根のふところに住んでいることを感じる。

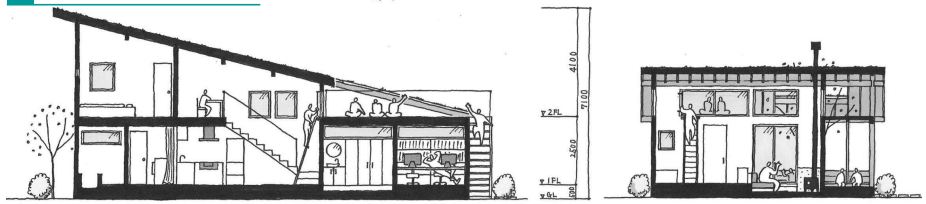


7 平面プラン



2階平面図 S=1/100
1階平面図 S=1/100

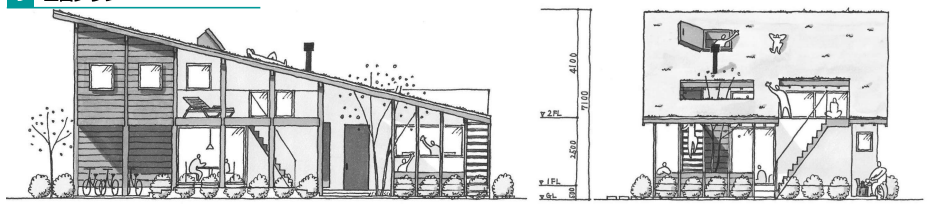
8 断面プラン

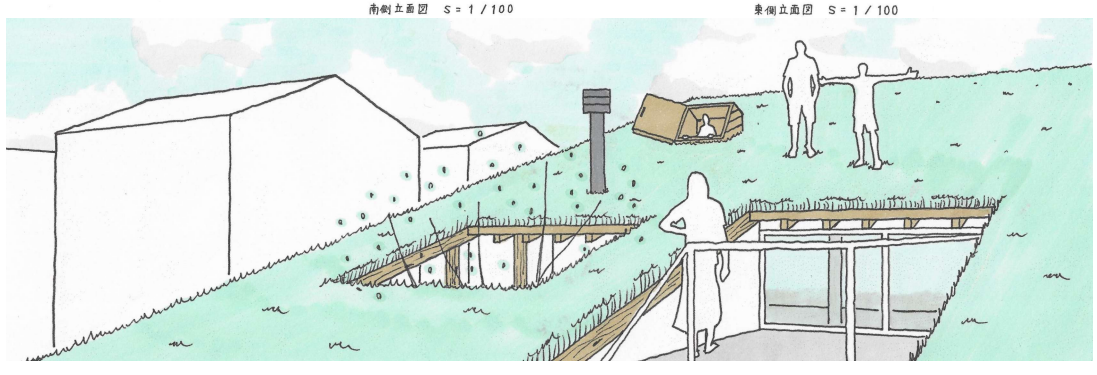


A－A'断面図 S=1/100
B－B'断面図 S=1/100

■LDKの吹抜け空間
1・2階は吹抜けにより空間が一体化。2階子ども室は仕切壁で空間をゆるく分け、1階LDKと互いに気配を感じる位置関係とした。吹抜けに面した子どもの勉強スペースは室内を見渡す特等席。

9 立面プラン



南側立面図 S=1/100
東側立面図 S=1/100

■屋内にも中間領域
屋内にも外部とつながる中間領域を設けた。床を300mm下げたソファコーナーは、屋外のあずまやコーナーと視線がつながる半屋内空間である。ダイニングは、大開口の建具を戸袋に引込むことで屋外テラスと一体的に使用できる。